

地域の社会資源として機能する 入所施設の在り方を旨とした実践報告

1. 地域生活支援型入所施設としての実践
2. 地域課題として取り組むソーシャルアクション

地域生活支援型入所施設としての実践

川崎市の指定管理施設 井田重度障害者等生活施設
障害者支援施設 桜の風 の実践

施設の紹介

川崎市指定管理施設

「井田重度障害者等生活施設」として平成25年4月開所
3障害対応 2法人による共同事業体運営

指定管理	運営法人	事業種別及び定員
	育桜福社会 主な対象 知的障害・身体障害	施設入所支援（50）生活介護（44） 短期入所（15）機能訓練（6：休止）
	川崎聖風福社会 主な対象 精神障害	宿泊型自立訓練（20）短期入所（5） 自立生活体験（川崎市単独事業 2）
	育桜福社会 （委託事業）	川崎市中核的地域移行支援事業（地域移行コーディネーターの配置）令和3年10月より

通過型➡地域生活支援型

「障害が重度だから地域で生活することができない」と諦めた思考に留まるのではなく、多くの困難さはあるけど、「どのような環境やサポートがあれば地域での生活を継続できるのか」ということを考え、地域に戻る『通過型入所施設』というコンセプトで運営開始。

ある家族の声「桜の風は通過型だからね…」

通過型という言葉は「永住型ではない」「必ず地域に戻る」というメッセージを地域に浸透させる強さはあったが、一方でその先がイメージできないネガティブな印象を持っていた。

入所施設➡地域 という一方向性ではない「地域生活支援型」
という表現に改訂した。

地域移行等の動向

令和7年8月時点で、68名が退所され、数多くの方が地域で暮らしています。

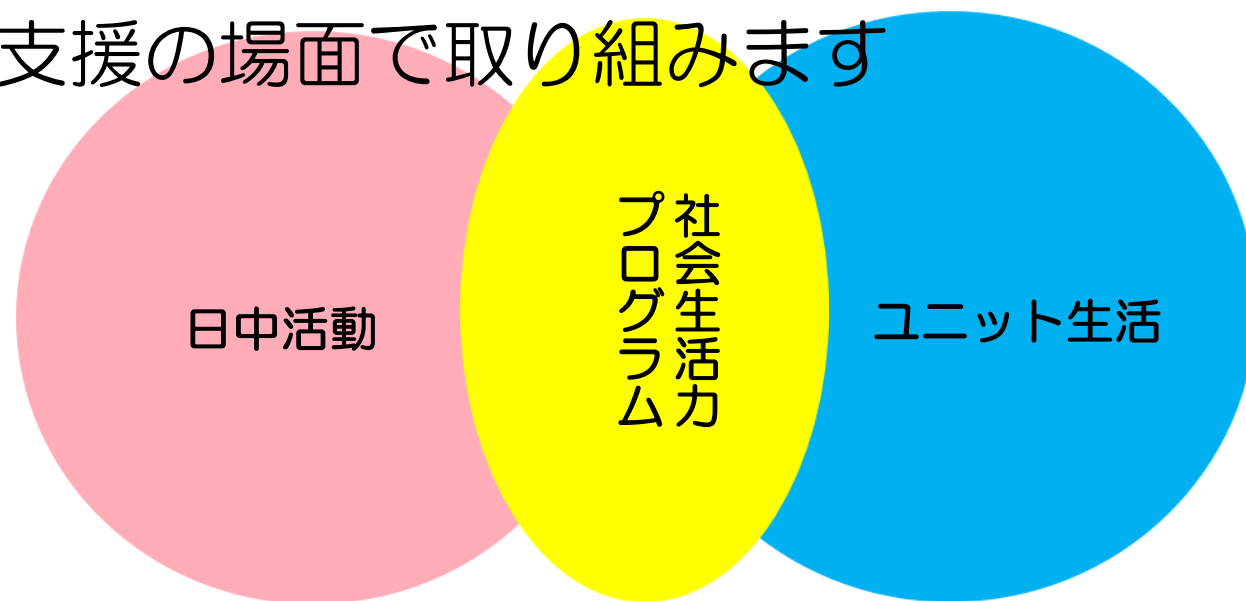
・ G H	45名
・ 家庭復帰	5名
・ 特養 & サ高住	7名
・ 他施設	5名
・ 病院	3名
・ 死亡	3名

地域移行後、何らかの理由で、戻ってくることもあります。（双方向性）

桜の風の支援の柱（SFA）

社会生活力プログラム（SFA）

桜の風では、社会生活力プログラムを日中活動だけでなく
ユニットでの生活場面でも取り組んでいます
グループプログラムと個別プログラムを合わせて
24時間の支援の場面で取り組みます



可能性をアセスメントする重要性

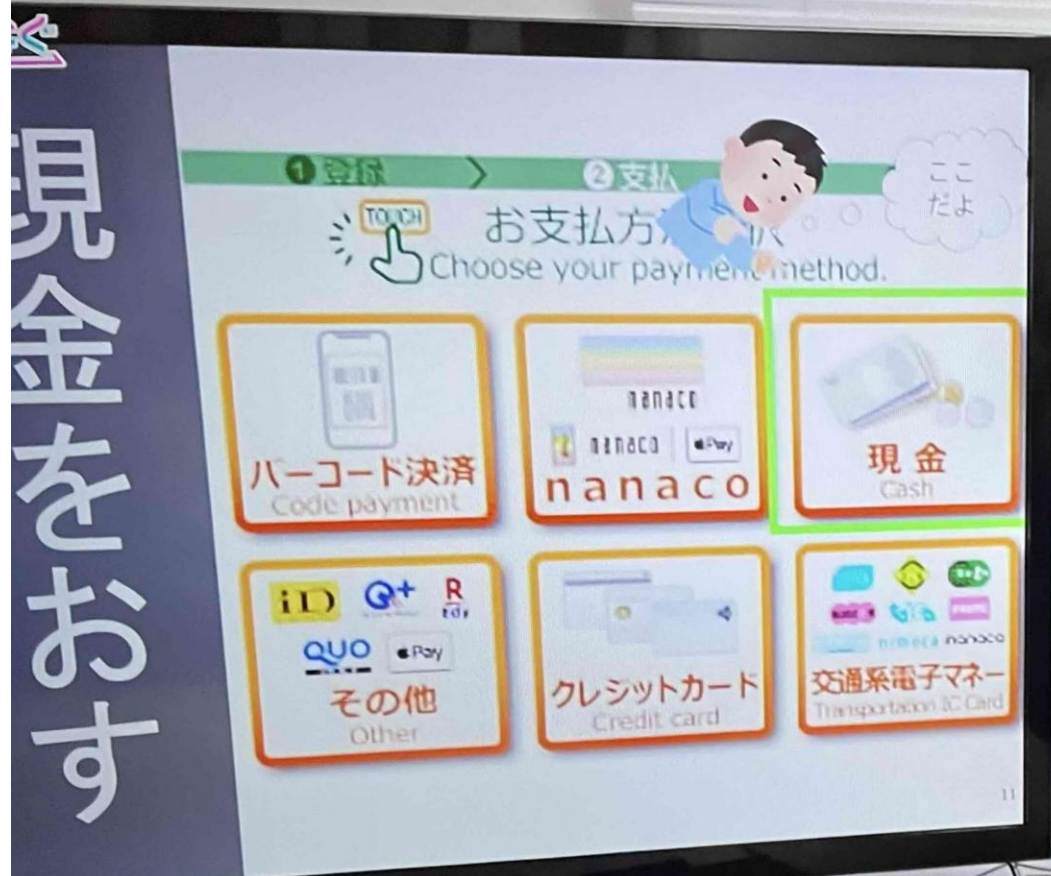
入所施設で「落ち着いて安定して暮らす」ことを目標とするのではない。

落ち着いて安定することは、新たなチャレンジに向けた準備
本人の発揮されていない力や、可能性を見出すアセスメントの視点が
必要

「～できそう」「～できるかも」ということを見つける

➡チャレンジする機会を作る支援

身近な日常生活にある余暇の拡充	自動販売機の利用・コンビニ等での買い物
生活イベントへの自立度の向上	交通機関の利用・散髪・通院など
生活拠点の可能性拡大	GHの見学、先輩を訪ねて、体験



知
どう選

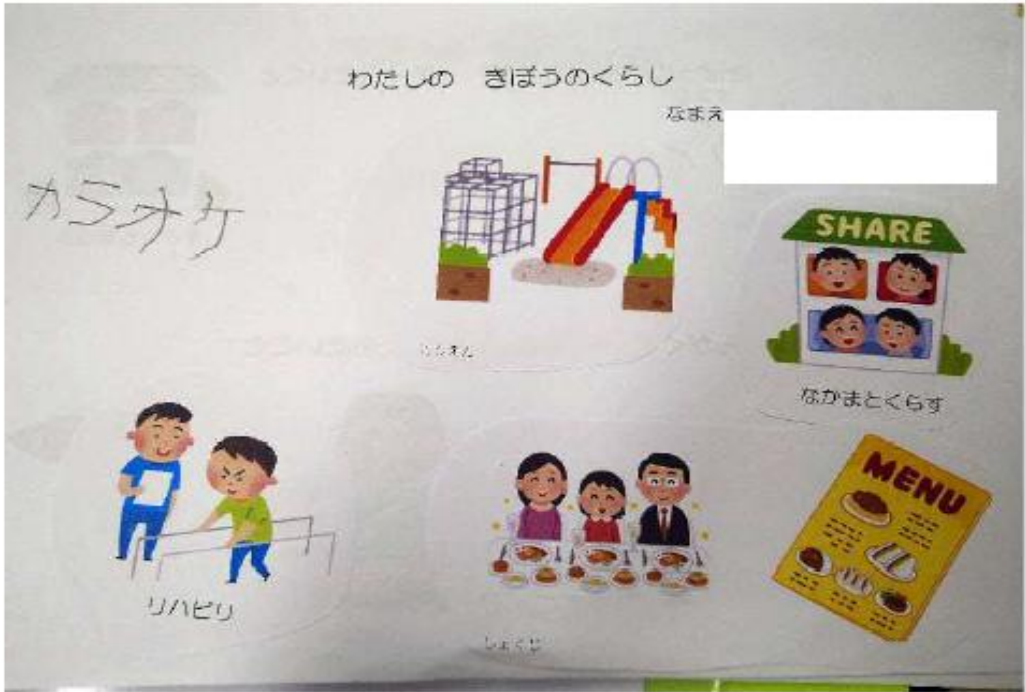
どこを押しますか?



会生活力プログラム

ワークシート

どこで、だれと、どんな暮らしをしたいかを考える
～住まいの見学（先輩を訪ねる）、グループホームの体験～



地域課題として取り組む ソーシャルアクション

協議会から委託事業化
中核的地域移行支援事業

「地域で暮らしたい」という当たり前の 想い

「入所施設からの地域移行」ということが国の示す基本指針や報酬改定等において強調されている。

障害者権利条約の批准後、2022年8月には国連による審査を受け、障害者の暮らしや教育等において改めてインクルーシブということを強く意識するべき時期にあるのだろう。

制度上の役割やサービス種別の垣根を越えて、また官民ともに、障害のある方（より手厚い支援を必要としている方）の「地域で暮らしたい」という当たり前の想いに向き合い、その人の望む暮らしを実現するための支援を考えていきたい。

「地域移行」という言葉

「地域移行」という言葉を考えてみる。

それは極めて障害福祉施策的な言葉のイメージから一度離れて、当たり前前に暮らす地域の生活者として「その人」を見る立ち位置から、考える必要がある。

狭義には、「地域に移行する」ということは、「地域ではない入所施設」や「長期に暮らしの場となっている入院生活」から、地域に移り住む際に使われている。

つまり入所の「出口」というパーツで使われる限局的な言葉になっている。

しかし、その人の暮らしの発端は、入所施設や長期入院ではない。

入所施設が唯一の解決策なのか

そもそも、もともとは地域で暮らしていた人たちである。

様々な生活上の困難さ（生きにくさ）や、支援上の理由（家族の対応力の変化を含む）により、現状のままでは地域での生活が立ち行かないほど困ってしまった。

そんな生活の窮状を解決する唯一の仕組みが入所施設だとするならば、「この人は入所施設でなければ暮らせない人」となってしまう。

だとすると、地域では入所施設をあと何件必要とするのか...

また、その発想は「措置の時代（平成15年以前）」と何が違うのか...

地域移行➡ 地域生活への復帰

もともと地域で生活していた人が、何らかの理由により、いま、地域で暮らすことに困難さを感じているならば、入所施設の支援が一時的に必要な局面なのだろう。

その人の人生における一時期、その困難さを入所施設で受け止め、本来のその人らしさを取り戻し、生活スタイルを回復するための支援を受ける。

わたしたち支援者は「入所施設における落ち着いた暮らし」を目指してしまいがちだが、そこで支援は終わらない。

どんな支援や環境、配慮やサポートがあれば新しい地域での暮らしを描けるのか、地域生活に復帰するための支援（地域生活のRedesignリデザイン）を考える必要がある。

つまり、「地域移行」は入所から出ず支援ではなく、新たな地域の暮らしを創造する支援と言える。

地域課題としてみんなで考えたい

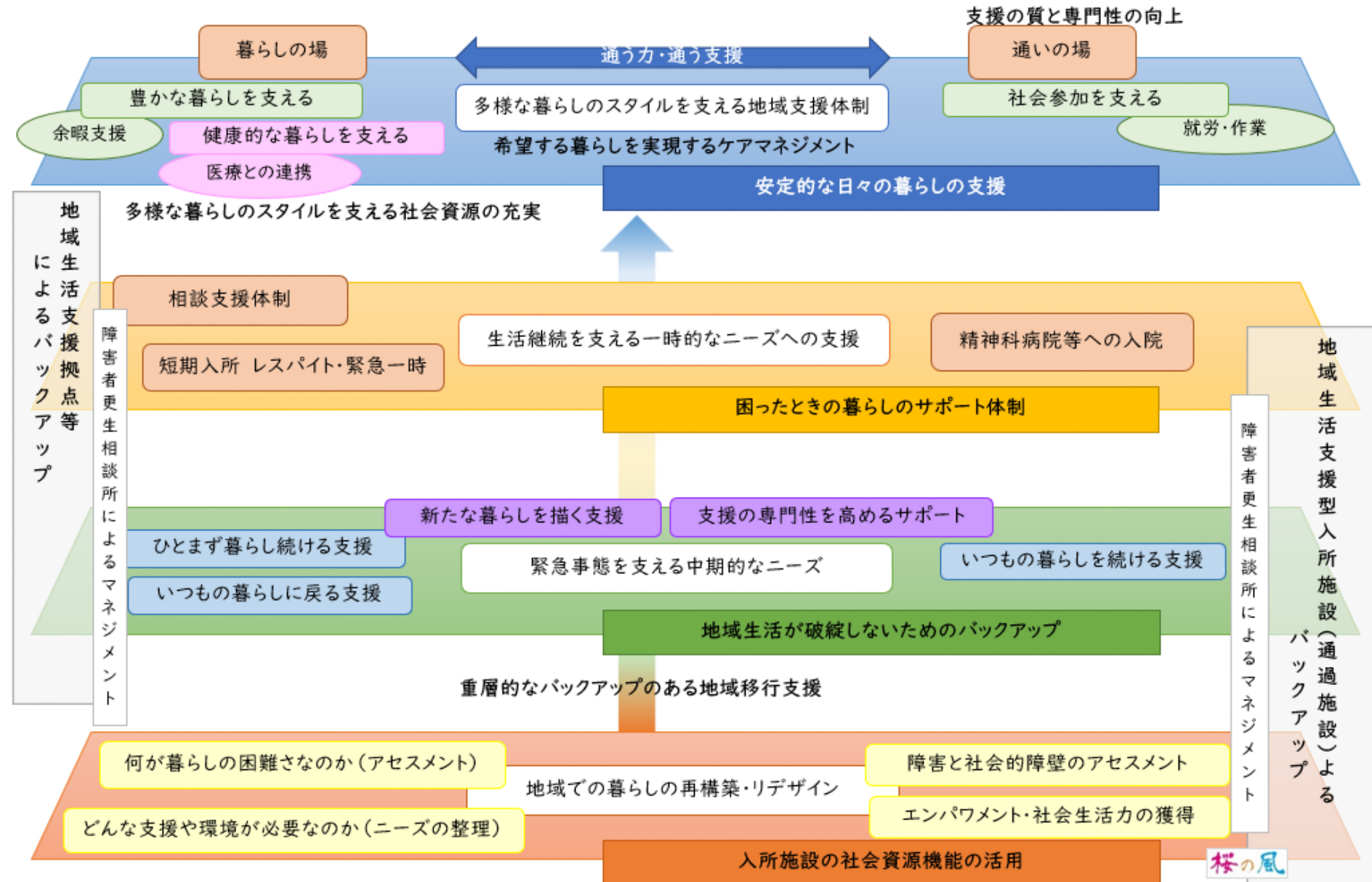
「新たな地域生活を創造する支援」と考えると、地域移行は入所施設だけの課題とは言えない。

地域移行は「地域課題」ととらえ、地域の支援者みんなで考え取り組んでいく意図がこの部会設立の背景にある。

「入所施設からの地域移行部会」の発足 令和3年10月

➡ 現在は部会は発展的終結とし、地域移行推進会議として継続

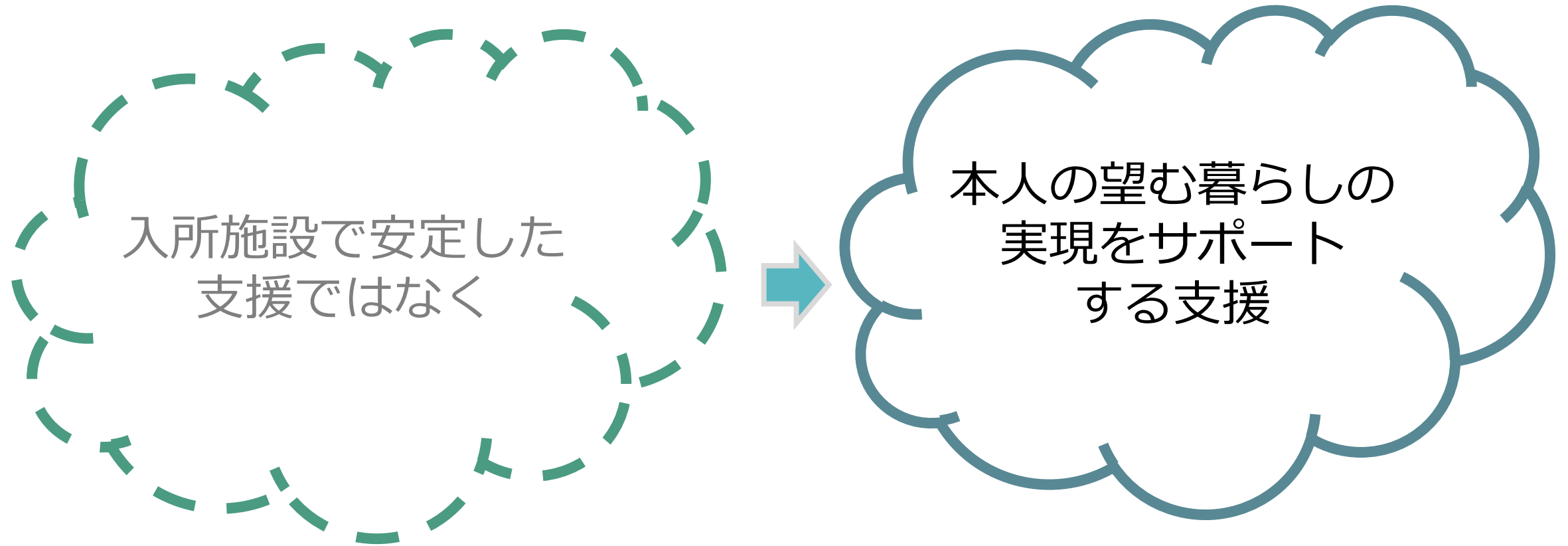
地域における重層的な支援体制の充実にに向けたイメージ



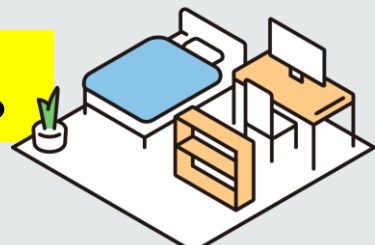
地域移行コーディネーターとは？

- ・ 所属する施設において、現場と連携しながら、地域移行の取り組みの推進を図る。
- ・ 地域生活支援型施設で培ってきた「知識や経験」を共有する。
- ・ 川崎市入所施設からの地域移行推進会議の事務局機能を担う。

入所施設の役割



早いうちから、「地域での生活」をイメージしながら、支援する。





「地域移行」を実現する8+1のフェーズ



障壁は何か

地域移行を阻む障壁

- 障害の重さや状態像を理由にして、取り組もうとすらしな
い支援者のあきらめ
- 資源のなさを理由にして、資源が見つかるまで待つ消極姿
勢
- 家族の反対を理由にして、可能性を見出し家族と共有する
ことをしない

桜の風の職員が高度な専門性を有しているわけではない
未熟であり、できていないことや課題も沢山ある
ただ、利用者の地域での生活を諦めないという気持ちだけは強い
桜の風があってよかったと思われるような施設でありたいという思いは強い